年次報告2013

東北大学

ISSN 2185-5196

東北大学埋蔵文化財調査室
年次報告2013

武家屋敷地区第16地点から望む千貫沢と千貫橋

東北大学埋蔵文化財調査室

東北大学埋蔵文化財調査室
年次報告2013

東北大学埋蔵文化財調査室　年次報告2013

目　次

Ⅰ．巻頭言……1
Ⅱ．東北大学埋蔵文化財調査室の概要……2
　1．東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査……2
　2．埋蔵文化財調査室の組織と施設……5
　3．運営委員会・調査部会……6
Ⅲ．2013年度（平成25年度）事業の概要……7
　1．埋蔵文化財調査の概要……7
　　（1）川内北地区の調査……9
　　（2）川内南地区の調査……13
　　（3）青葉山北地区の調査……19
　　（4）富沢地区の調査……21
　2．遺物整理作業……25
　3．年次報告・調査報告の刊行……25
　4．保存処理事業……26
　5．資料保管状況……26
　6．研究活動……28
　　（1）受託研究・共同研究・研究協力等……28
　　（2）学会発表等……28
　　（3）科学研究費採択状況……28
　7．教育普及活動……28
　　（1）非常勤講師……28
　　（2）授業など教育活動への協力……28
　　（3）保管資料の貸出……28
　　（4）外部からの派遣依頼等……29
　　（5）広報活動……29
　8．東日本大震災による被災文化財の救援活動……30
《引用・参考文献》

Ⅳ．資料……32
　1．国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程……32
　2．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2013年度）……34
　3．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2013年度）……34
　4．東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧……35

Ⅰ．巻頭言

『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2013』を刊行いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室は、施設整備などに先立つ、構内遺跡の記録保存のための調査と、それに関連する業務を担当する、東北大学の特定事業組織です。埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』と『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』という、二種類の報告書を刊行しています。

施設整備などに伴う記録保存のための本調査については、その発掘調査報告書を、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』（以下『調査報告』と略記）というシリーズ名で、各調査ごと刊行しています。『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』（以下『年次報告』と略記）は、埋蔵文化財調査室の事業概要を迅速に報告するという目的のために、毎年度ごとに報告しています。

本年次報告では、埋蔵文化財調査室が2013年度に実施した埋蔵文化財調査の概要、および調査室が実施したその他の事業について概要をとりまとめて報告いたします。前年度も終盤となった2013年１月に、平成24年度補正予算が発表され、東北大学には震災復興に関わる多額の施設整備費が措置されることとなりました。その中には、事前に発掘調査が必要な事業も多数含まれていたため、2013年度は当初の予定を急遽変更し、年度当初より対応する調査を実施することとなりました。そのため、実施中であった川内北地区の課外活動施設新営に伴う調査と、中断中であった地下鉄東西線川内駅前整備に伴う調査は、これら補正予算に関わる調査を先行して実施するため、その後に先延ばしせざるを得なくなりました。

東日本大震災以降、2012年度は震災復旧事業に伴う調査を実施してきましたが、2013年度には震災復興に関わる事業に伴う調査を実施することとなりました。そのため埋蔵文化財調査室は、経験したことのない業務量をこなす必要にせまられております。幸い、学内外の関係機関や関係者の多大なご協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申しあげるとともに、今後もご支援とご協力をお願いいたします。

埋蔵文化財調査室長　阿子島　香

Ⅱ．東北大学埋蔵文化財調査室の概要

１．東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査

東北大学には、各キャンパスに加え多くの研究施設があり、これらの構内には多くの埋蔵文化財が存在する（表１、図１）。特に川内地区は、ほぼ全域が仙台城跡の二の丸地区と武家屋敷地区にあたっている（図２）。

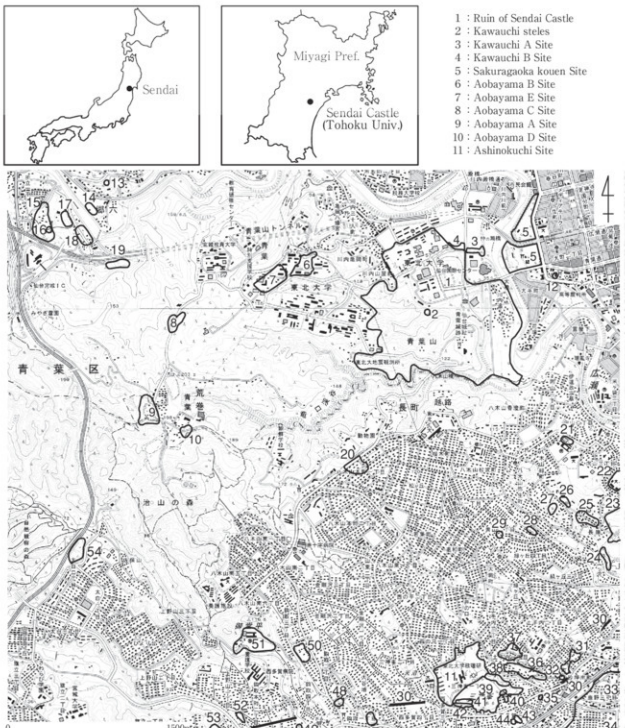
現在の日本では、これらの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）において掘削を伴う工事を行う場合、文化財保護法により届出が義務づけられている。工事の掘削で遺跡が壊される場合には、計画の中止や変更により遺跡を現状で保存することが、文化財保護の観点では最善である。しかし現実には、現状保存は難しい場合が多い。そのため、発掘調査を行い記録を作成することで、次善の策とする記録保存という方法が取られている。記録保存のための発掘調査は、経費を原因者が負担した上で、地方公共団体が実施するのが基本である。

構内に遺跡が存在する大学では、施設整備事業などの工事に先立つ記録保存のための調査を実施する組織として、大学内部に埋蔵文化財調査を担当する組織を設けることが進められてきた。考古学や関連する学問分野の専門研究者が大学内部に所属している場合には、学術的に充分な検討がなされるという社会的信頼に基づき、大学独自の埋蔵文化財調査組織が設けられ運営されている。学内に調査組織を設けていると、結果的に迅速な調査と施設整備事業の円滑な推進が図られるという側面もある。

東北大学においても、同様の理由から、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置された。これ以降、東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、調査委員会の実務機関である埋蔵文化財調査室が実施してきた。1994年度には、調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置された。2006年度には、特定事業組織としての埋蔵文化財調査室へ改組され、事業を引き継いでいる。

表１　東北大学構内の遺跡

団地名	所在地住所	遺　跡　名	県遺跡番号	時　代	備　考
川内１	仙台市青葉区 川内27-1・41他	仙台城跡	０１０３３	近世	二の丸地区・二の丸北方武家屋敷地区・御裏林地区
	仙台市青葉区 川内12-2	川内古碑群	０１３８６	鎌倉	弘安10年（1287）・正安４年（1302）他
	仙台市青葉区 川内41	川内Ｂ遺跡	０１５６５	縄文・近世	
青葉山２	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山Ｂ遺跡	０１３７３	縄文・弥生 古代	
	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山Ｅ遺跡	０１４４３	縄文・弥生 古代	
青葉山３	仙台市青葉区 荒巻字青葉468-1	青葉山Ｃ遺跡	０１４４２	旧石器	
富沢	仙台市太白区 三神峯一丁目101	芦ノ口遺跡	０１３１５	縄文・弥生 古墳・古代	
川渡	大崎市鳴子温泉 大口字蓬田	上川原遺跡	３６００６	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	丸森遺跡	３６０３８	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	東北大農場２・３号畑遺跡	３６０９８	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町西	町西遺跡	３６１０６	弥生	
小牛浜	牡鹿郡女川町 小牛浜	小牛浜Ｂ遺跡	７３０２１	縄文	宿舎裏の山林部分



1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：川内A遺跡　4：川内B遺跡　5：桜ヶ岡公園遺跡　6：青葉山B遺跡　7：青葉山E遺跡
8：青葉山C遺跡　9：青葉山A遺跡　10：青葉山D遺跡　11：芦ノ口遺跡　12：片平仙台大神宮の板碑　13：郷六大日如来の碑
14：慈岡城跡　15：郷六城跡　16：郷六建武碑　17：沼田遺跡　18：郷六御殿跡　19：郷六遺跡　20：松ヶ岡遺跡
21：向山高裏遺跡　22：萩ヶ丘遺跡　23：茂ヶ崎城跡　24：二ツ沢横穴墓群　25：萩ヶ岡B遺跡　26：八木山緑町遺跡
27：二ツ沢遺跡　28：青山二丁目遺跡　29：青山二丁目B遺跡　30：杉土手（鬼除土手）　31：砂押屋敷遺跡　32：砂押古墳
33：富沢遺跡　34：泉崎浦遺跡　35：金洗沢古墳　36：土手内窯跡　37：土手内遺跡　38：土手内横穴墓群　39：三神峯遺跡
40：金山窯跡　41：三神峯古墳群　42：富沢窯跡　43：裏町東遺跡　44：裏町古墳　45：原東遺跡　46：原遺跡　47：八幡遺跡
48：後田遺跡　49：町遺跡　50：神漉山遺跡　51：御堂平遺跡　52：上野山遺跡　53：北前遺跡　54：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡

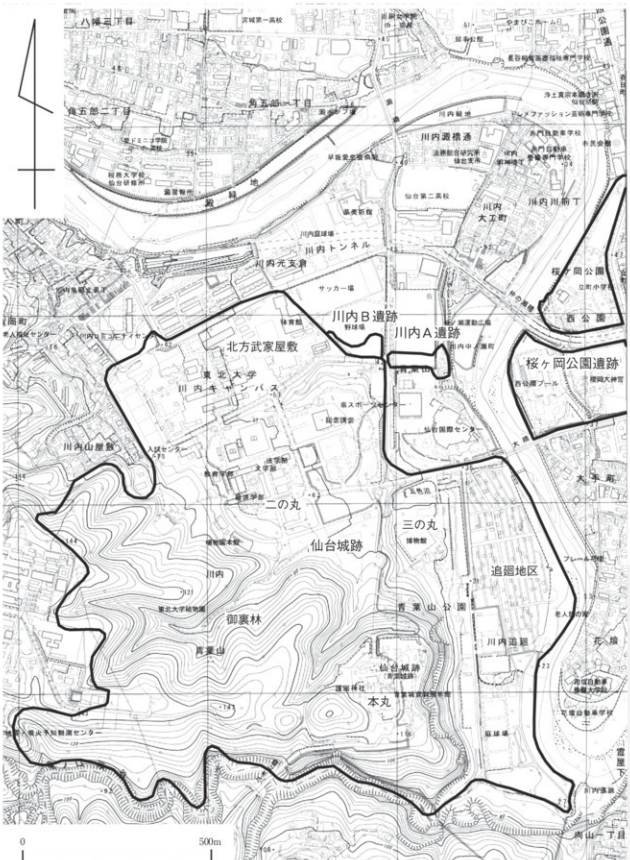


図2　仙台城と二の丸の位置

2．埋蔵文化財調査室の組織と施設

埋蔵文化財調査室の職員は、併任の調査室長１名、文化財調査員３名（うち特任准教授１名、専門職員２名）、事務補佐員１名（時間雇用職員）、および整理作業を担当する作業員（時間雇用職員）からなっている。2013年度は、24年度補正予算に関わる調査を急速実施する必要に迫られた上に、以前から実施し完了していない調査も多数残っているため、通常より業務が大幅に増加することが見込まれた。そのため、2013年度と2014年度の２ヶ年間の予定で、准職員（技術補佐員）１名を増員することとなった。そのための財源は、発掘調査経費の人件費を利用することとなった。2013年度の埋蔵文化財調査室の職員は、表２の通りである。これ以外に、発掘調査を実施している期間は、発掘調査に従事する作業員（時間雇用職員）を雇用している。

埋蔵文化財調査室を運営するにあたって必要な経費は、埋蔵文化財調査室運営費として措置されている。内訳は、事務補佐員１名の人件費と、光熱水料、自動車維持費、消耗品費などである。

発掘調査については、事業費の中に組み込まれる形で、事業ごとに予算化されている。

調査終了後の整理作業と報告書印刷刊行費については、全学的基盤経費によって措置されている。整理作業に携わる作業員の賃金も、ここから支弁されている。

埋蔵文化財調査室の主要な業務は、調査委員会の設置以降、片平地区の生命科学研究科３階の一画を使用して行なってきたが、生命科学研究科建物の整備工事に伴い、仮施設での業務を経て、2011年２月に施設部などが入っている本部棟４の１階に移転した。本部棟４に移転した後の部屋面積は191.5㎡で、これに廊下を仕切って収蔵庫としている部分20.5㎡が加わる。室長室兼事務室、調査員室、作業室、予備室、収蔵庫からなっている。収蔵庫は、出土遺物の中でも、報告書に図示され、借用や調査依頼の多い資料についてはこちらで保管している。それ以外の遺物については、保存処理作業棟南側に置かれている収蔵庫において保管している。作業室は、実測などの作業をはじめとする整理作業を行う部屋で、報告書などの文献を保管している書架も置いている。予備室は、将来的は展示ケースなどを整備し、構内遺跡の発掘調査成果を展示し紹介するコーナーとする予定である。

保存処理の作業は、2001年度に生命科学研究科の南側に設置された作業棟（プレハブ平屋建・79㎡）を利用している。また、ガレージの一部の34㎡を使用しており、調査室用の公用自動車を保管している他、保存処理用の大型水槽を設置している。発掘調査用機材の一部も、ここで保管している。2003年度には、出土遺物の収蔵庫として保管倉庫（プレハブ２階建・202㎡）が作業棟の南側に設置され、専用の保管場所が確保された。

2011年３月11日に発生した東日本大震災は、東北大学にも多大な被害をもたらし、埋蔵文化財調査室でも被害が生じたが、全般に被害程度は軽微で、早期に復旧することができた。家具類の転倒防止措置や、棚への転落防止ベルト（タナガード）の設置が、被害の軽減に極めて効果的であった。ただし川内南地区にあった発掘調査用の資材倉庫（プレハブ平屋建・58㎡）は、老朽化していたこともあり、2012年度に取り壊して撤去した。

表２　2013年度埋蔵文化財調査室職員

職　名		氏　名　等	備　考
調査室長	文学研究科教授	阿子島　香	併任
文化財調査員	特任准教授	藤沢　敦	
	専門職員	柴田　恵子	
	専門職員	菅野　智則	
調査補助員	技能補佐員	大久保　弥生	発掘調査経費を財源とした職員
事務補佐員	時間雇用職員	内海　幸一	埋蔵文化財調査室運営費を財源とした職員
整理作業員	時間雇用職員	４名（通年４名）	全学的基盤経費を財源とした職員

3．運営委員会・調査部会

東北大学埋蔵文化財調査室では、運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する調査部会が設置されており、委員会・部会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、年間の事業予定・予算等などの基本的事項を審議している。調査に関わる具体的かつ専門的な事項は、必要に応じて調査部会を開催して審議することとしている。

2013年度（平成25年度）は、運営委員会は１回、調査部会は１回開催した。運営委員会・調査部会の開催月日と議事内容は、以下の通りである。

運営委員会で報告した、埋蔵文化財調査室規程の改正は、施設整備に関わる委員会の改組に伴うものである。東北大学の施設整備に関わる委員会としては、2012年度までは「施設整備・運用委員会」があり、その各地区キャンパス整備委員会から、それぞれ１名が埋蔵文化財調査室の運営委員会の委員となっていた。2013年度からは、「施設整備・運用委員会」が「キャンパス総合計画委員会」として改組された。そのため埋蔵文化財調査室の運営委員会には、「キャンパス総合計画委員会」から、その委員若干名を委嘱することとなった。「キャンパス総合計画委員会」のもとに置かれている、川内キャンパス環境整備協議会と青葉山キャンパス環境整備協議会から、それぞれ１名の委員を、調査室運営委員会の委員として委嘱した。あわせて、「キャンパス総合計画委員会」の委員である、キャンパスデザイン室の杉山丞特任教授に、調査室運営委員会の委員を委嘱した。

調査部会は、国際文科系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査の結果を検討するために実施した。当計画では、確認調査結果を踏まえ、取り扱いについて仙台市教育委員会および宮城県教育委員会と協議を行うこととなっていた。そのため調査成果について、専門的な観点から検討していただいたものである。調査部会の議事に先立ち、確認調査の現地の視察を行っている。

埋蔵文化財調査室運営委員会（於：施設部会議室）

５月22日　審議事項　（１）平成24年度埋蔵文化財調査結果及び平成25年度の埋蔵文化財調査計画について
（２）平成24年度調査室運営費決算及び平成25年度調査室運営費予算について
（３）平成24年度の整理作業結果及び平成25年度の整理作業計画について
（４）専門分野の委員の交代について
（５）その他
報告事項　（１）埋蔵文化財調査室規程の改正について
（２）文化庁長官からの表彰について
（３）川内萩ホール展示スペース常設展示について
（４）その他

埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会（於：文学研究科大会議室）

４月18日　審議事項　（１）国際文科系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査について
（２）その他

Ⅲ．2013年度（平成25年度）事業の概要

１．埋蔵文化財調査の概要

2013年度は、記録保存のための本調査３件、確認調査１件、立会調査10件を実施した（表３）。

通常の立会調査は、2009年度途中から、東北大学埋蔵文化財調査室が実施している。仙台市教育委員会の指示に従い、工事日程を事前に仙台市教育委員会に提出した上で、当調査室が立会調査を行っている。

2011年３月11日に発生した東日本大震災では、東北大学の施設も、各所で多大な被害を受けた。応急的な復旧工事や、応急仮設校舎・仮設宿舎建設については、2011年度に工事が実施された。本格的な復旧工事は、平成23年度補正予算で措置され、2012年度に事業が本格化することとなった。さらに2012年度には、学内予算で整備される、川内北地区での課外活動施設新営に伴う仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（ＢＫ15）の調査を、急遽実施することとなった。震災復旧事業に関わる調査を優先して実施し、2012年度中に終了できたため、2013年度は課外活動施設新営に伴う武家屋敷地区第15地点の調査を実施し、さらに途中で中断していた地下鉄東西線川内駅前整備に伴う武家屋敷地区第14地点（ＢＫ14）の調査を、引き続き実施する予定であった。

ところが前年度も終盤となった2013年１月に、平成24年度補正予算が発表され、東北大学には震災復興に関わる多額の施設整備費が措置されることとなった。その中には、発掘調査が必要な事業も多数含まれるため、2013年度の調査計画は全面的な見なおしが必要となり、年度当初より補正予算関係の調査を実施することとなった。平成24年度補正予算に関わる事業としては、川内北地区の学生支援センター新営に伴う仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（ＢＫ16）の調査、富沢地区の電子光理学共同研究施設研究棟増築に伴う芦ノ口遺跡第10次調査（ＴＭ10）を、年度当初より順次実施することとなった。あわせて、前年度の３月に重機掘削を開始していた、川内南地区の国際文科系教育研究拠点整備計画に伴う確認調査（仙台城跡二の丸地区第18地点）も実施した。

調査中であった課外活動施設新営に伴う武家屋敷地区第15地点（ＢＫ15）については、調査体制を維持したままとし、これら調査の合間に可能な作業を実施し、少しでも作業を進行させることとした。しかし、他の調査を

表３　2013年度調査概要表

調査の種類	地区	調査地点（略号）	原　因	調査期間	面積（㎡）	時期
本調査	川内北	川内課外活動施設北東側（ＢＫ15）	（川内１）課外活動施設新営工事	4/1～3/31（前年度より継続）	1,479	近世
	川内北	管理棟東側（ＢＫ16）	（川内１）学生支援センターその他新営	4/1～12/19	1,200	近世
	富沢	研究棟西側職員集会所（ＴＭ10）	（富沢）電子光理学共同研究施設研究棟増築	6/3～28	310	縄文
確認調査	川内南	文系大講義棟Ａ・Ｂ周辺（ＮＭ18）	国際文科系教育研究拠点施設整備計画	3/13～4/26（前年度より継続）	117.4	近世
立会調査	青葉山北	生物学棟西側駐車場（2013-1）	（青葉山２）理学部車庫新営工事	4/9	－	－
	青葉山北	理・薬塾いの公園（2013-2）	（青葉山２）理・薬塾いの公園外灯新設工事	5/8	－	－
	青葉山北	理・薬塾いの公園（2013-3）	理・薬地区地震計設置工事	5/30	－	－
	富沢	変電所北東側（2013-4）	（富沢）テニスコート改修工事	8/21	－	－
	川内北	国際交流センター南側（2013-5）	（川内１）国際交流センター前汚水管改修工事	9/17	－	－
	川内北	課外活動施設西側（2013-6）	川内北キャンパス給水管漏水復旧工事	11/25	－	－
	川内南	図書館１号館周辺（2013-7）	（川内１）附属図書館１号館改修工事	1/10、3/10・17・18（翌年度継続）	－	－
	富沢	廃棄物貯蔵庫西側（2013-8）	（富沢）テニスコート便所改修機械設備工事	3/10	－	－
	川内南	萩ホール東側斜面下（2013-9）	（川内１）萩ホール汚水管改修工事	3/12	－	－
	青葉山北	サイクロトロンRIセンター（2013-10）	（青葉山１）量子脳疾患・がん研究センター整備	3/18	－	－

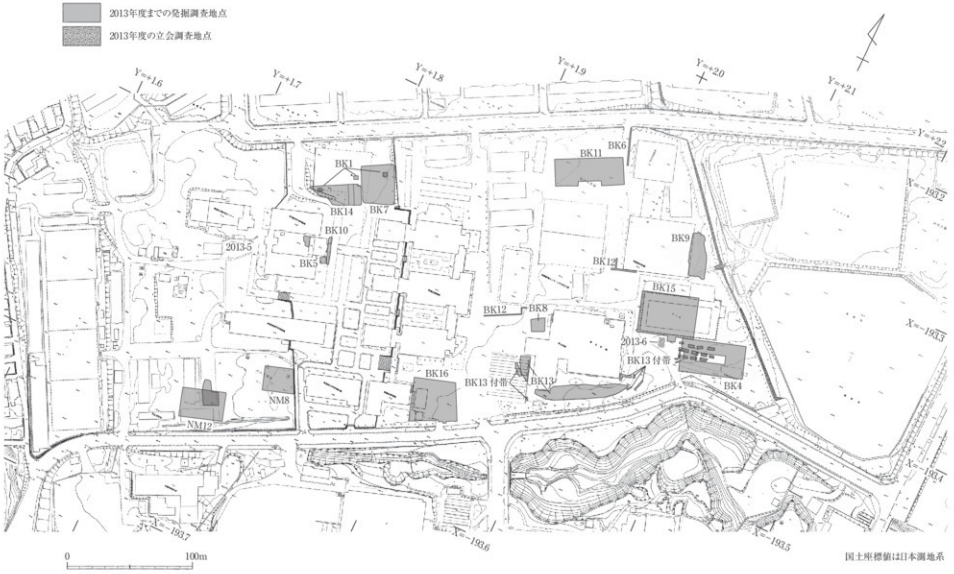


図3　川内北地区調査地点

行っていたことから、あまり作業は進行できなかった。そのため第15地点の調査は、翌2014年度に継続となった。

2011年度から行っていた地下鉄東西線川内駅前整備に伴う武家屋敷地区第14地点（ＢＫ14）の調査は、2012年４月まで作業を行い、ほぼ半分の面積の調査を終えた段階で中断していた。この第14地点については、第15地点の調査終了まで、中断期間を延長することとした。そのため2013年度は、第14地点の作業は行っていない。

（1）川内北地区の調査

川内北地区では、本調査２件、立会調査２件を実施した（図３）。

・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（ＢＫ15・課外活動施設新営に伴う調査）

川内北地区の東半部には、厚生施設や課外活動施設が置かれている。その中の屋外プールが置かれていた場所を利用して、屋内プールが入る課外活動施設を新たに建設する工事に伴う調査である。東日本大震災によって、片平地区などの課外活動施設が被害を受け、一部は使用できなくなった。この状況の中で、従来から懸案であった、片平地区の老朽化した課外活動施設を川内地区へ移転するために、学内予算を財源に新たな施設を建設することとなったものである。新施設建設の方針が、2011年度末になって急遽具体化したため、2012年５月から調査を開始した。ただし、震災復旧のための平成23年度補正予算による事業も同時に進行することから、震災復旧工事に伴う調査を最優先しながら、その合間を縫って課外活動施設新営に伴う調査を実施してきた。

調査地点は、現在ある課外活動施設の新営に伴い1994～1995年度に実施した武家屋敷地区第４地点の調査区の北西側に隣接する。第４地点の調査では、江戸時代の各時期にわたる多数の遺構が検出され、遺物も多数出土している。この調査データから、既存プール建設による削平は一部にとどまり、大部分は破壊されずに残っているものと考えられた。そのため基礎工事で掘削される範囲の全域を、記録保存のための事前調査の対象とした。

基本層序は、おおむね第４地点と同様である。１層は、陸軍以降の盛土層を含む表土層である。２層・３層は、明治20年頃の陸軍第二師団造成時と考えられる整地層で、第４地点でも確認されている。４層は、明治時代の武家屋敷撤去後で、第二師団造成以前の整地層である。第４地点では、４層上面で畝状遺構が検出されており、畑として使用されていた区域があることが判明している。５層は、調査区北半部のやや低い部分に見られた整地層である。５層上面では、遺構はごくわずかしか検出されないことから、４層と大きな時間差はなく、明治時代以降に形成された可能性が考えられる。５層の下位は、地山層となる。

図４　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点調査状況

2012年度は、調査区北半部に分布する５層の掘り下げ作業の途中まで調査を行っていた。2013年度には、４月から５月にかけて、他の調査の合間に５層の掘り下げの作業を進めた。５層の掘り下げが修了した５月28日には、北側の一段低くなっている範囲の、ラジコンヘリによる空撮と写真測量を行った（図４）。これによって、調査区全域で地山面まで掘り下げが達したこととなった。これ以降は、地山面から掘り込んでいる江戸時代の遺構の精査を進めることとなったが、６月から11月は、調査区を維持しておく作業以外は、ほとんど作業は行えなかった。武家屋敷地区第16地点の調査がほぼ終了した後、12月より本格的な作業を再開した。12月と３月は、江戸時代の遺構の精査を行ったが、厳寒期の１月と２月は、ごく部分的な作業を実施しただけにとどまる。江戸時代の遺構の精査は、翌2014年度に継続して実施することとなった。なお、第15地点の調査は途中であるため、全ての調査が終了した後に整理作業を行い、調査報告書を作成する予定である。

・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（ＢＫ16・学生支援センターその他新営に伴う調査）

平成24年度補正予算で事業化されることとなった、学生支援センター新営に伴う調査である。新しく建設される学生支援センターは、川内北地区の管理棟の東側に隣接して造られることとなった。建物工事で掘削される区域の全域を調査対象として、記録保存のための事前調査を実施することとした。

二の丸裏門である「台所門」から北に延びる道路が千貫沢を渡るところには、土橋の「千貫橋」が造られ、その西側は堀となっていたことが江戸時代の絵図で判明する。この土橋は、現在も川内北地区から南地区へ至る道路となっている。土橋の東側には水門のある石垣が現存し、江戸時代から続くものと考えられる。今回の調査区は、「千貫橋」の北西側にあたる（表紙写真）。これまでの調査成果と絵図との対比から、二の丸北側の堀の北岸が、今回の調査区の南端付近に相当すると考えていたが、調査区の中ほどまで堀が延びていることが明らかとなった。

早期に調査する必要があったため、建物の設計が未定の段階から、調査を開始することとなった。予定地には、ガレージや倉庫など使用中の建物が存在し、それらの区域は撤去工事以降でないと調査できなかった。また、車両通路を確保する必要もあった。このような制約があったため、分割して順次調査を実施することとした。

最初に、東側の建物の無い区域から調査を開始した。建物計画が未確定であったため、おおよその範囲で調査を開始することとし、４月１～５日に重機での表土掘削を行い調査を開始した。建物計画が確定したため、５月28・29日には２回目の重機掘削を行い、工事範囲に合わせて調査区を東側に拡張した。さらに掲示板の移設工事が終了した後の７月17～19日に３回目の重機掘削を行い、工事範囲に合わせて調査区を北側に拡張した。この３回の掘削した範囲を、東半部の調査区とした。この東半部の調査では、米軍時代に埋設された石油タンクが２基発見された。撤去は建物工事の際に行うこととしたが、内部に油混じりの水が溜まっていたため、専門業者に依頼してこの滞留液を抜き取り、窒素ガスを封入して密閉する作業を行った。６月は、富沢地区の調査を行うため一時作業を中断した。調査区の南側に堀が存在することが明らかとなったため、堀の上部埋土までを調査した段階で、堀の部分の調査は中断することとした。なお、堀の上部埋土については、先行して行ったトレンチ調査で、遺物がほとんど含まれないことが判明したことと土量が多いことから、８月21日に重機で撤去した。堀の上部埋土までの調査が終了した段階で、８月28日にラジコンヘリによる空撮と写真測量を行った（図５－２）。

９月５～13日には東半部の調査区の堀以外の北側と東端の通路部分を埋め戻し、ガレージが置かれていた北西側の重機掘削を行った。北西部の調査は10月５日に空撮と写真測量を実施して終了した（図５－１）。

10月７～14日に、北西部を埋め戻し、南西部の重機掘削を行った。南東部は埋め戻していなかったため、合わせて南部の堀を調査することとした。南西部も、堀の上部埋土は、11月７・８日に重機で掘削した。堀の上部埋土までを撤去した段階で、11月20日に空撮・写真測量を実施した。さらに堀の下部埋土の調査を行い、12月11日に最終状況の空撮・写真測量を行って調査を終了した（図５－３）。工事着手まで若干期間が空くため、深い部分の埋め戻しを12月16～19日に行い、全ての作業を終了した。

1．北西部調査状況

2．東半部調査状況
（堀上部埋土を除去した段階）

3．南半部調査状況（最終状況）

図5　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点調査状況

今回の調査区は、堀の部分以外では、近代の盛土を除去すると、すぐに地山層となる。川内北地区は、本来は西から東へ緩やかに下る地形であったと考えられる。近代以降に段切り状に整地され、現在では平坦面が階段状に連なっている。周辺での調査成果から、江戸時代の地表面は、調査区東端で現在の地表面付近であったと考えられ、１ｍ近く削平されている可能性がある。もとの標高の高かった西側は、さらに削平の度合いが大きいと考えられる。この削平のため、堀の部分を除いた北側の岸の部分では、江戸時代に遡る遺構は石組の井戸が１基確認されただけである。石組の様相から、江戸時代に遡る井戸と考えられるが、安全確保の観点から上部の調査にとどまったため、詳細な時期は不明である。そのため、堀との対応関係も判明していない。

調査区南半部で堀跡が確認された。堀跡の埋土は大きく上部と下部に分けられ、堀は新古の２段階に分かれる。そのため検出遺構は、以下の３段階に大別できた。

《堀埋没後》

堀新段階の埋土が堆積した後の段階である。新段階の堀埋土が堆積した後、大規模に削平が行われたと考えられる。削平が行われたのは、陸軍第二師団が置かれた明治21年頃と思われる。削平された後に、石組溝・溝・掘立柱列・近代建物基礎などが造られているが、いずれも近代以降に下るものである。このうち５号溝は、堀の北端部分に造られており、堀の北端を壊している。５号溝は途中まで埋め戻された後、底面に石を敷いて石組溝が構築される。この石組溝は南北方向の石組溝に接続するが、側石は全て取り払われていた。

《堀新段階》

堀の北端は５号溝付近と考えられるが、５号溝で全て破壊されており、北端の立ち上がりの状況は不明である。新段階の埋土は、下部では砂と粘土がラミナ状に堆積しているが、それより上部には砂と粘土が一気に堆積したような状況を示す部分もある。堀の上部埋土を除去した面には、クラックが多数入っており、一定期間地表面となっていたと考えられる。堀新段階の底面は緩い傾斜で南側に下がっていくが、調査区南端近くから急傾斜で大きく落ち込んでいく。そのため、浅い部分と深い部分の２段になっていたと考えられる。北側の浅い部分は、「千貫橋」の石垣水門のレベルより標高が高いため、通常は水没しない範囲と見られる。洪水時など水門からの水の排出が追いつかない際に、この区域まで水没した可能性が考えられる。傾斜が急になる変換点付近には、溝状の掘り込みがあり、その中に樹木の根の痕跡が並んでいた。植栽のために掘られた溝の可能性が考えられる。

岸に近い傾斜の緩い部分では、堀古段階埋土の上面で造られた、溝などの遺構が確認されている。

《堀古段階》

堀の上部埋土を除去した段階で、不整形の大規模な落込みが確認され、古段階の堀の存在が明らかとなった。不整形な平面形状から、洪水の際に自然に掘り込まれた流路の可能性も考えられる。古段階の堀は、東側の堀跡古段階Ａと、西側の堀跡古段階Ｂに分けられる。埋土の状況が異なることから時期が異なるものと考えられるが、両者が重なる部分は、大学共同溝で調査ができなかったため、切り合い関係などは不明である。

古段階の堀については、現地表からの深さがかなり深くなるため、安全が確保できる範囲で調査を行うこととした。岸が落ち込んでいく部分は一定の深さまで調査し、岸に掘り込まれた遺構がないか確認した。これ以外には、深掘り調査区を４ヶ所に設けて埋土の状況などを把握した。埋土は、基本的に自然堆積と考えられる。遺物はきわめて少なく、瓦・陶器の小片がわずかに出土しただけで、細かな時期が判る資料は無い。

この武家屋敷地区第16地点の調査では、二の丸北側の堀の、北岸の状況が明らかとなった。これまでにも、二の丸地区第８地点（年報５）、第12地点（年報11）の調査で、同じ堀の北岸を検出している。これらの成果をあわせて、二の丸北側の堀の位置を、ほぼ復元することができるようになった。調査成果は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告５』において、とりまとめて報告する予定である。

川内北地区で立会調査を実施した２件の概要は、以下のとおりである。

・国際交流センター南側汚水管改修工事（2013－5）

使用中の汚水管が破損し、樹木の根が入り込み使用ができなくなったため改修する工事である。既存管の入れ替えであるため、既存管埋設時の掘り方の範囲内での掘削にとどまり、問題はなかった。

・課外活動施設西側給水管漏水復旧工事（2013－6）

課外活動施設西側に埋設されていた給水管が、漏水をおこしたため緊急に工事を実施したものである。既存管を露出させ、漏水箇所を補修する工事であり、既存管掘り方内の掘削にとどまり、問題はなかった。

（2）川内南地区の調査

川内南地区では、確認調査１件、立会調査２件を実施した（図６）。

・仙台城跡二の丸地区第18地点（ＮＭ18）

文系大講義棟を建て替える形で、国際文化系教育研究拠点施設を整備する計画に伴う確認調査である。予定地には現在２棟の講義棟が並んで建てられているが、講義棟の間の中庭部分などでは、江戸時代の地層・遺構が残存している可能性が高いと考えられた。川内南地区は、仙台城跡の二の丸地区に相当し、仙台市教育委員会が将来国史跡に指定したいとの意向を表明している、重要な区域にあたる。そのため仙台市教育委員会・宮城県教育委員会と協議し、整備計画の可否を含め対処方針を検討するデータを得るために、計画区域での遺構などの保存状態を確認する目的で確認調査を実施することとなった。2013年の３月後半に、重機による掘削作業を開始した。手掘りによる精査は、翌2013年度の４月に実施した。調査成果の概要が判明した４月18日には、埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会を開催し、調査状況の視察を行った上で、調査成果について検討する機会を設けた。４月23日には、仙台市教育委員会文化財課、宮城県教育委員会文化財保護課の担当者に視察していただき、調査状況を確認していただいた。その後、５月17日まで埋め戻し作業を行い、現状に復旧した。

既存の建物周囲で、調査が可能な５ヶ所に調査区を設けた（図７）。調査面積は、１区38.7㎡、２区26.0㎡、３区21.2㎡、４区135㎡、５区18.0㎡で、合計117.4㎡である。二の丸地区では、二の丸建物群が焼失した明治15年（1882年）の火災後の片付けに伴う整地層が各所で発見されており、この地層には江戸時代の遺物が大量に含まれる場合がある。そのため明治15年火災層より新しい、陸軍第二師団期と考えられる地層までを除去して、保存状態を確認することを基本方針とした。ただし、二の丸期の遺構を確認する必要がある場所については、一部については明治15年火災層を除去している。

５ヶ所全ての調査区において、大学建物基礎、米軍共同溝、第二師団基礎、現代の埋設管などで破壊されている部分以外は、江戸時代の地層は残されており、完全に破壊されている調査区はない。既存建物建設に際しては、工事範囲を広く掘削することは行われておらず、地表面から基礎杭を打ち込み、基礎を設置する範囲だけを掘削して工事を行ったものと考えられる。そのため、基礎の周囲に、広くても１ｍ以内の余掘りがなされた範囲だけが破壊されていた。それ以外の区域は、建物に覆われる範囲であっても、江戸時代の地層が残されている部分が多いことが判明した。

４区以外の４ヶ所では、第二師団期と考えられる炭を大量に含む黒色の整地層が確認され、二の丸期の地表面に重ねる形で整地がなされている。絵図との対比では、４区は「中奥」の範囲となっており、「表」との間には「土手」と描かれた段差があったと考えられる。この段差をはさんで、二の丸期の地表面が異なっており、「表」側は一段低くなっている。段差の下側は、ほぼ平坦に造成されていたと考えられる。明治時代の第二師団期には、この段差を埋める形で盛土が行われた関係で、段差より下側は明治時代以降の盛土が厚くなり、結果的に江戸時代の地層の保存状態が良くなったと考えられる。

いずれの調査区でも、二の丸期の整地層が確認されている。二の丸期整地層の途中には、１ないし２段階の地表面が存在したと考えられ、何回かにわたって整地が行なわれたものと考えられる。元禄年間の大改造や文化元

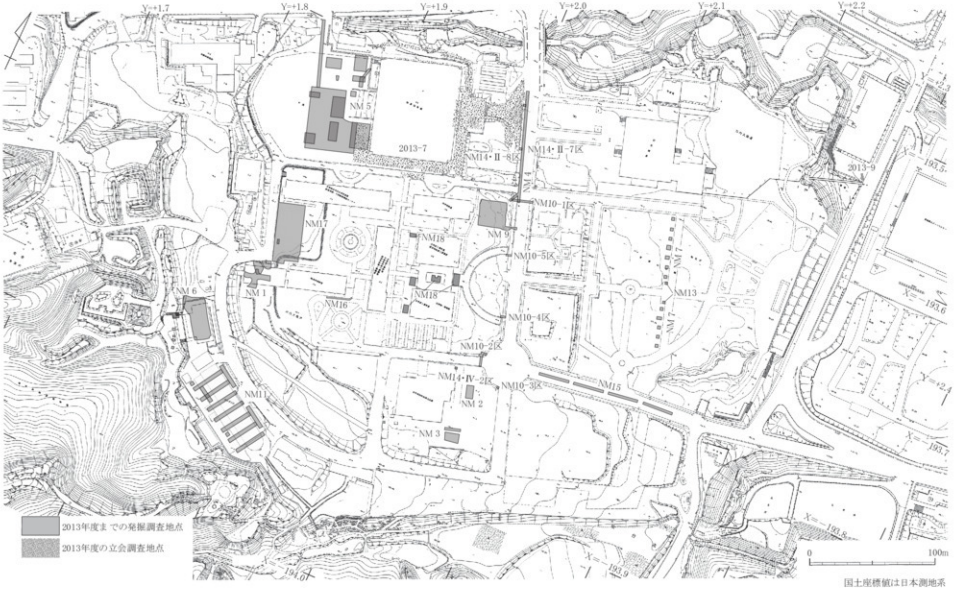


図6　川内南地区調査地点

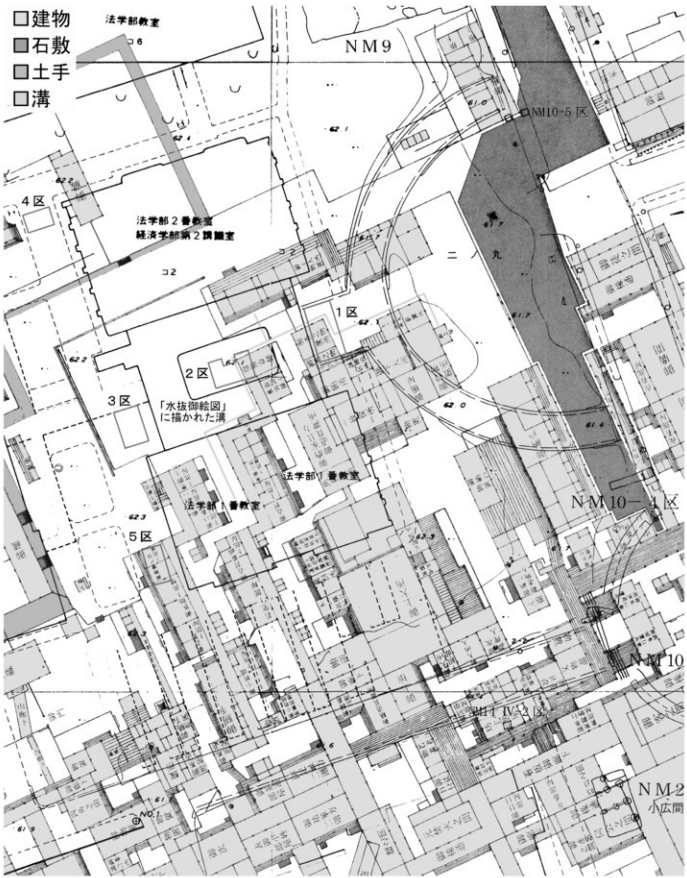
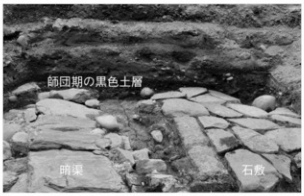
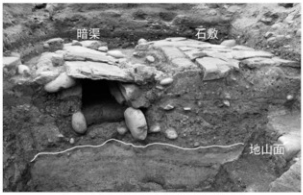


図7　仙台城跡二の丸地区第18地点調査区と絵図との対比
（縮尺1/600、「文化元年御造営絵図写」を使用）

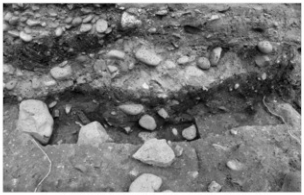
1．1区全景（東から）

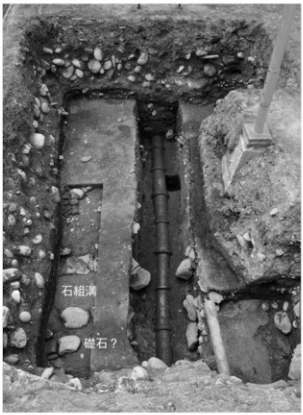


2．1区南壁断面（北から）

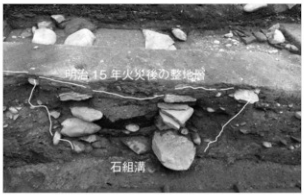


3．1区土管掘乱南壁断面（北から）


4．1区溝状遺構サブトレンチ断面（西から）



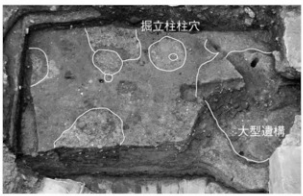
5．2区全景（東から）



6．2区土管掘乱南壁東半部断面（北から）

7．2区土管掘乱南壁西半部断面（北から）

図8　仙台城跡二の丸地区第18地点調査状況（1）



1．3区全景（東から）

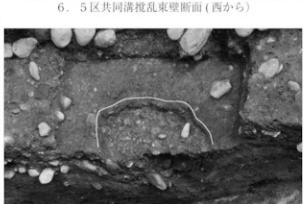
2．3区共同溝撹乱西壁断面（東から）

3．4区全景（南から）

4．4区西壁断面（東から）

5．5区全景（南から）

6．5区共同溝撹乱東壁断面（西から）



7．5区遺構確認状況（西から）

図9　仙台城跡二の丸地区第18地点調査状況（2）

年の焼失後の再建が考えられる。江戸時代初頭の二の丸造営以前の地表面は、この整地層の下位にあたるため、残されている部分が多い。文・法合同研究棟の調査では、二の丸造営以前の伊達政宗代に置かれていた屋敷に関わる遺構・遺物が、二の丸整地層の下位で発見されており、今回の調査区周辺でもこの時期の遺構・遺物が残されている可能性が高い。既存建物の基礎があった３区では、江戸時代の整地層が厚く、江戸時代初頭の地表面は建物基礎より下位に位置する。そのため、江戸時代の整地層が厚い区域では、既存建物基礎の下位に、江戸時代初頭の遺構面が残されている可能性が高いことが判明した。

＝１区（図８）＝

土管埋設により一部が破壊され、その北側は第二師団期に上部が削平されているが、これら以外は江戸時代の地層が残る。南側には石敷と、石組溝に石で蓋をした暗渠がある。暗渠は、北側では上部が破壊されているが下部は残されている。暗渠は第二師団期と思われる。北側では、暗渠に切られる遺構が確認される。この暗渠に切られる遺構は、掘り方が東西方向に延びているため、東端部分でサブトレンチを設けて一部を掘り下げた。保存状態が良くないため確実ではないが、東西方向の石組溝である可能性がある。ただし、２区で検出されている石組溝より底面がかなり浅く、直接つながっていた可能性は低いと考えられる。

＝２区（図８）＝

土管の掘り方によって一部が破壊されている以外は、江戸時代の地層が残されている。東よりに、二の丸期の石組溝が確認されており、「水抜御絵図」に描かれた溝と、推定位置が一致する。石組溝は、大量の炭と黄褐色土で埋められた後、焼土混じりの整地層で埋められている。明治15年の火災後に埋めたものと考えられる。石組溝の脇には、建物の礎石の可能性のある石も確認された。

＝３区（図９）＝

大学共同溝、渡り廊下屋根の基礎などで一部が破壊されているが、それ以外では江戸時代の地層が残されている。第二師団期の黒色整地層を除去した面が二の丸の最終段階の地表面と考えられ、この面で遺構が確認された。掘立柱の柱穴と考えられる遺構、大型の遺構などが確認できる。

＝４区（図９）＝

南端に第二師団期の大規模な基礎があり、埋設管でも一部が破壊されている。それ以外では江戸時代の地層が残っているが、二の丸期の地表面の標高が高く上部は削平されていると考えられる。ただし、二の丸期の整地層や遺構埋土は残っている。

＝５区（図９）＝

米軍共同溝による破壊以外は、江戸時代の地層が残る。二の丸期の遺構の可能性がある落ち込みが確認できる。

この確認調査の結果、既存建物の基礎による破壊は限定的で、建物範囲内でも江戸時代の遺構が残存している可能性が高いものと判断された。この調査結果を受けて、施設整備の進め方について、東北大学と仙台市教育委員会・宮城県教育委員会との協議が行われることとなった。

当初東北大学施設部では、確認調査の結果を踏まえた協議で方針を策定した後に、概算要求での予算化を目指すというスケジュールを想定していた。しかし、24年度補正予算での事業化が突如決定されたため、対応に苦慮することとなった。施設部が地下の遺構に影響をあたえない工法での建築方法を公募したところ、竹中工務店による工法が候補となった。これは、既存基礎のみを撤去した上で、既存杭の試験を行い、利用できる杭は既存のものを利用する工法であった。荷重などで杭を更新する必要がある場合は、既存杭を抜き取り同じ場所に新たな鋼管杭を打つというものである。これらの杭の上に、既存基礎の掘り方の大きさにおさまる規模の基礎を新たに設置し、鉄骨構造の建物を建設するという提案であった。既存の基礎掘り方以外は、新たな掘削が発生せず、遺跡を新たに損壊することは避けられる工法の提案であった。

今回の事業は、平成24年度補正予算で、震災復興事業として位置づけられていた。宮城県教育委員会では、震

災復興事業については、発掘調査基準を弾力化して運用している。そのため、恒久的な建造物であっても地下の遺構に影響が無い範囲については、記録保存のための調査は実施せず、確認調査で済ませることが可能となっている。今回の事業については、震災で被害を受けた建物をほぼ同じ規模で建て替える震災復興事業であり、地下の遺構に影響を与えないという前提で、建設はやむを得ないという判断となった。その上で、重要な遺跡に恒久的な建造物を建設するため、必要に応じて、さらに確認調査を行うこととなった。追加の調査を行うためには既存建物を解体することが必要なため、既存建物を解体した後の2014年度に確認調査を実施することとなった。

このように二の丸地区第18地点は、2012～2013年度の第Ⅰ次調査と、2014年度の第Ⅱ次調査の、２回の確認調査が行われることとなった。そのため２回の確認調査をまとめて、調査報告書を作成する予定である。

２件の立会調査の概要は、次のとおりである。

・図書館１号館改修工事（2013－7）

平成24年度補正予算の事業として、図書館１号館の全面的な改修工事が行われることとなった。それに伴う、周辺の外構整備や各種配管の改修などの工事である。外構整備では、既存の舗装やよう壁の改修については、既存設備設置の際の掘削範囲におさまるようにした。建物北側に新設される歩道は、表土のみの掘削にとどめた。電気配管・排水管については、既存埋設管を入れ替える形で行うこととなった。また、既存地下通路の撤去も、既存施設掘り方の内側で工事することとした。そのため、工事に合わせて順次立会調査を行って対処することとしたが、全体工程が翌年度まで延びたことから、2014年度に継続して立会調査を実施することとした。

・萩ホール東側斜面下汚水管改修工事（2013－9）

萩ホールの汚水管は、東側の斜面を下り、市道に埋設されている公共汚水桝に接続している。この汚水管は、2008年度に改修工事を行ったが（年次報告2008）、公共汚水桝との接続は古い桝を利用していた。仙台市によって接続用の汚水桝が改修され、位置が若干移動したことに伴い、汚水管末端の接続部分を改修する工事である。既に削平されている可能性が高い区域であったため、立会調査とした。遺構・遺物は発見されなかった。

（3）青葉山北地区の調査

理学研究科・薬学研究科などが所在する青葉山北地区では、立会調査４件を実施した（図10）。

立会調査を実施した４件の概要は、以下のとおりである。

・生物学棟西側駐車場理学研究科車庫新営工事（2013－1）

サイクロトロン実験棟北側にあった理学研究科の車庫が、東日本大震災による地滑りで取り壊しとなったため、生物学棟西側の駐車場に車庫を新築する工事である。車庫新築計画に伴い実施されたボーリング調査では、現地表より４ｍの深さまで盛土であるとの所見が示され、建築予定地点が大きく盛土された区域である可能性も考えられた。そのため2012年度に、建築計画場所の遺跡の状況を把握する目的で、確認調査を実施している（年次報告2012）。その結果、今回の工事予定区域は、現地表より２ｍ以上の深さまで盛土で厚く整地されていることが判明した。調査地点周辺は、南西から北東方向へ延びる尾根状の地形となっているが、調査区周辺は、尾根の中でも標高が下がる鞍部状の部分か、あるいは沢状に開析された部分と考えられる。大学造成時に、尾根の高い所を削平し、大規模に盛土を施して平坦にしたと考えられる。南側の尾根の高い部分での縄文時代の包含層が検出されている区域と比べると、今回の調査区域の造成以前の地形は標高が大きく下がるため、包含層が延びてくる可能性は考え難いと判断された。そのため、これ以上の調査は行わず、工事実施時に立会調査を行うこととした。

建物本体部分と、汚水管埋設部分で掘削工事が行われたが、ほとんどは新しい盛土で、問題はなかった。

・理・薬願いの公園外灯新設工事（2013－2）

理学研究科と薬学研究科の間に残っている丘陵は、大きな改変を受けていない区域で、青葉山Ｂ遺跡の範囲となっている。この丘陵は松林となっていたが、公園として整備されることとなり、2006年度と2007年度に工事が

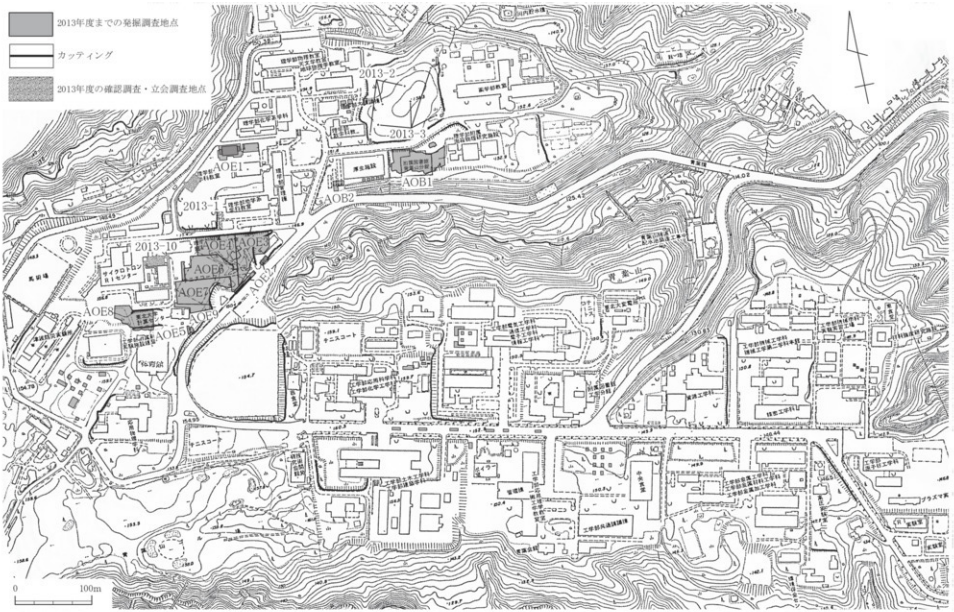


図10　青葉山地区調査地点

行われた。その際、丘陵端の階段が設置される部分について確認調査を行ったが、いずれにおいても遺構・遺物は発見されていない（年報24、年次報告2007）。階段以外の芝貼り・園路整備などの工事は、大きな掘削を行わないため立会調査としたが、遺構・遺物は発見されなかった。今回の工事は、この公園の園路に沿って、外灯を新たに設置する工事である。掘削規模が小さいため、立会調査としたものである。ローム層まで掘削が達する部分もあったが、遺構・遺物の発見はなかった。

・理・薬憩いの公園地震計設置工事（2013－3）

同じく理・薬憩いの公園に、地震計を設置する工事である。掘削規模が小規模であるため、立会調査としたものである。遺構・遺物の発見はなかった。

・サイクロトロンＲＩセンター量子脳疾患・がん研究センター整備事業（2013－10）

理学研究科の西側にあるサイクロトロンＲＩセンターのサイクロトロン棟東側に、量子脳疾患・がん研究センターの建物を新たに増築する工事である。工事区域は、青葉山Ｅ遺跡第４・６・７・９次調査区の西側になる。これらの調査成果から、丘陵の最も高い部分で、大学造成時に縄文時代の地層は削平されていると想定される区域であるため、立会調査で対処することとした。調査の結果、縄文時代の地層は残っていないことを確認した。

（4）富沢地区の調査

富沢地区の芦ノ口遺跡では、本調査１件、立会調査２件を実施した（図11）。

・富沢芦ノ口遺跡第10次調査（ＴＭ10・電子光理学共同研究拠点研究棟増築に伴う調査）

東北大学の電子光理学研究センターや職員宿舎がある富沢団地は、ほぼ全域が芦ノ口遺跡の範囲内となっている。今回の調査は、現在の研究棟の西側に、研究棟を増築する工事に伴うものである。これまでに９次の調査が行われており、第７次調査は今回の調査区の北25ｍのところにあたる。第７次調査では、南よりの区域では上部が一部削平されているものもあったが、粘土採掘坑と考えられる土坑が多数検出されている（調査報告３）。

富沢地区は、戦前は陸軍幼年学校が置かれていた場所で、造成の際に平坦面を造り出したものと考えられる。もとの地形は、南側の三神峯丘陵側から、北側へ緩やかに下っていたと考えられる。研究棟の南側には、造成による１ｍ以上の段差があり、研究棟付近は削平が比較的大きな区域と考えられた。ただし第７次調査区の様相から、深い遺構が残存している可能性もあるため、工事予定範囲の全域の310㎡で事前調査を実施した。

調査区は、昭和19年（1944年）に建築された幼年学校の建物で、職員集会所として利用されていた建物の建っていた場所にあたる。この既存建物を解体した後の、2013年６月に調査を実施することとなった。現在の表土と、幼年学校造成時の整地層を除去すると、基盤の地山層が露出し、遺構は発見されなかった（図12・13）。調査区全域に、既存建物のコンクリート製布基礎の掘り方がある。それとは別に、方形の掘り方に川原石が詰められた、古い段階の幼年学校の建物基礎と考えられる基礎掘り方が並んでいた。このように、幼年学校時代の基礎による撹乱が多数存在し、上部の削平が大きいこともあり、本来の地層の残存状況は良くない。基盤の地山層は、砂礫を主体とするものがほとんどの区域に広がっていた。これまでの調査成果と対照すると、粘土採掘の対象となる、基本層序の粘土層より下位の層序のみが存在していると判断された。採掘対象となる粘土層が、残っていない区域であると考えられる。

遺物は、幼年学校造成時に動かされた整地層から、縄文土器２点が出土しただけである。同じ地点で出土しており、もとは同一の破片と考えられるが、保存状態が良くなく接合しない。縄文が施されていたと思われるが、それ以上の詳しい特徴は不明である。この調査については、本報告をもって、調査報告とする。

２件の立会調査の概要は、以下のとおりである。

・変電所北東側テニスコート改修工事（2013－4）

変電所北東側の既存テニスコートの改修工事である。既存のコートの舗装と、ネットフェンスなど附属の諸設

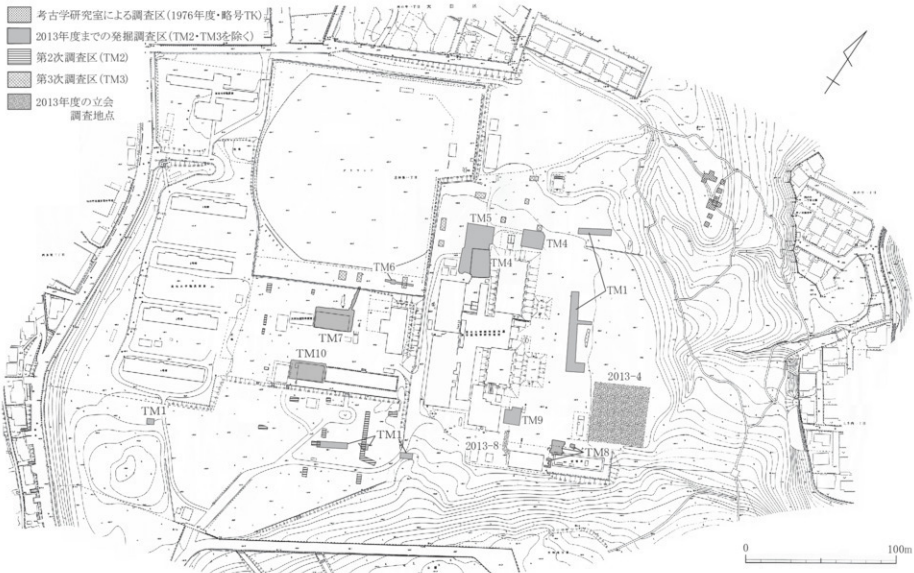
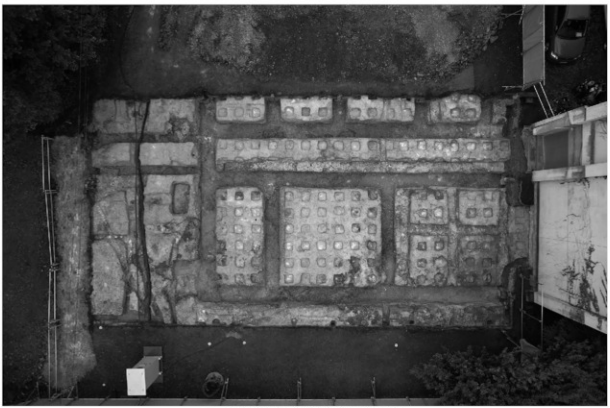


図11　富沢地区調査地点



1．芦ノ口遺跡第10次調査区全景（上が北）

2．芦ノ口遺跡第10次調査区と周辺の状況（南西から）

図12　富沢地区芦ノ口遺跡第10次調査状況（1）

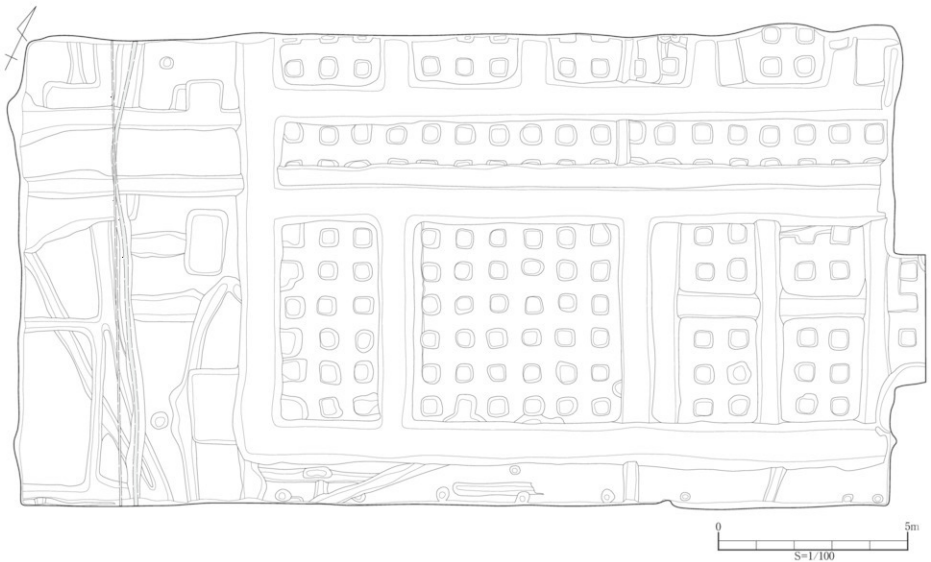


図13　富沢地区芦ノ口遺跡第10次調査状況（2）

備を更新するものである。ほとんどが、既存施設設置の際に掘削された範囲の掘削であった。切り株の撤去など、やや深く掘削される工事もあったが、ある程度の盛土が行われている範囲であるため、問題はなかった。

・廃棄物貯蔵庫西側テニスコート便所改修機械設備工事（2013－8）

テニスコートの改修にあわせて、コート利用者用の便所を、変電所西側の廃棄物貯蔵庫の一画に設けることとなった。それに伴い、建物から既存桝まで汚水管を埋設する部分で、掘削工事が行われることとなった。掘削範囲が小規模なため立会調査とした。一部で地山層が露出する部分もあったが、遺構・遺物は発見されなかった。

2．遺物整理作業

2013年度は、次の４件の整理作業を実施した。

①芦ノ口遺跡第７次調査（ＴＭ７）の整理作業

2009年度に実施した、電子光理学研究センター光源加速器棟新営に伴う調査である。粘土採掘坑と考えられるピットを83基検出している。遺物は、土師器や縄文土器などが、２箱出土している。2013年度は、出土遺物の写真撮影、遺構・遺物図版のレイアウト、報告書の原稿作成と編集などの作業を実施した。

②芦ノ口遺跡第８次調査（ＴＭ８）の整理作業

2009年度に実施した、電子光理学研究センター特高変電所受変電設備改修その他工事に伴う調査である。遺構は検出されていないが、丘陵側からの崩壊土層に若干の遺物が含まれていた。遺物は、縄文土器などが１箱出土している。2013年度は、出土遺物の写真撮影、遺構・遺物図版のレイアウト、報告書の原稿作成と編集などの作業を実施した。芦ノ口遺跡第７次調査と第８次調査の整理作業は当年度で終了し、調査成果は『芦ノ口遺跡第７次調査・第８次調査』（東北大学埋蔵文化財調査室調査報告３）として取りまとめて、印刷刊行した。

③青葉山Ｅ遺跡第９次調査（ＡＯＥ９）の整理作業

2012年度に実施した、理学系総合研究棟新築復旧に伴う調査である。土坑７基が検出され、縄文時代早期と中期の土器や石器が約250点（２箱）出土している。2013年度は、遺構図面のトレースなどの作業を実施した。

④芦ノ口遺跡第９次調査（ＴＭ９）の整理作業

2012年度に実施した、電子光理学研究センターＲＩ排水処理設備改修に伴う調査である。沢状の落ち込みが検出され、その周辺から、縄文土器・石器や土師器が２箱出土している。2013年度は、遺構図面のトレースなどの作業を実施した。

3．年次報告・調査報告の刊行

埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査年報』（以下『調査年報』と略記）を、１から24まで刊行してきた。この『調査年報』には、発掘調査以外の各種事業を含む当該年度に実施した事業の概要報告と、実施した発掘調査報告の両方を、併せて掲載してきた。2010年度より、年度ごとの事業概要の報告と、発掘調査の報告を、分離して刊行していくこととした。年度ごとの事業概要については、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』（以下『年次報告』と略記）という形で、毎年報告することとした。本調査を実施した発掘調査報告については、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』（以下『調査報告』と略記）というシリーズ名で、各調査ごとに、調査報告書を刊行していく形に移行した。それぞれの調査について、整理作業が終了次第、順次刊行していくこととしている。これまでに刊行した『調査年報』『年次報告』『調査報告』については、Ⅳ．資料に、一覧を掲載している。

2013年度は、『年次報告』１冊、『調査報告』１冊の、合計２冊を印刷刊行した。

『年次報告』は、前年度の2012年度の事業概要を掲載した、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2012』を刊行した。2012年度の、発掘調査や立会調査の概要と、整理作業や保存処理作業など、関連する調査室の業務概要を取りまとめて掲載した。

『調査報告』は、『芦ノ口遺跡第７次調査・第８次調査』（東北大学埋蔵文化財調査室調査報告３）を印刷刊行した。2009年度に富沢団地の電子光理学研究センターで調査を実施した、２件の発掘調査成果を取りまとめたものである。第７次調査は光源加速器棟新営に伴う調査で、第８次調査は特高変電所受変電設備改修その他工事に伴う調査である。第７次調査では、縄文時代・古墳時代の粘土採掘坑が多数検出されている。

４．保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査室では、仙台城跡の出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と金属製品については、当調査室で保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（調査年報16）。

2012年度までの作業によって、一部の大型製品を除くと、2010年度までの調査で出土した木製品については、保存処理は終了している。2011年度以降の調査では、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（ＢＫ14）、第15地点（ＢＫ15）などで木製品が出土している。これらの調査は継続中のため、本格的な整理作業を行っていないが、一部の資料については保存処理を開始した。翌年度以降も、継続して作業を行う予定である。

銅製品については、2012年度までの作業によって、2010年度までの調査で出土したものについては、保存処理は終了している。しかし、保存処理体制が整う2000年度以前の調査で出土した銅製品を再確認したところ、未処理のままとなっていた資料が若干確認された。そのため、これらの資料の保存処理を2013年度に実施した。全ての作業を終えるまでには至っていないので、2014年度にも継続して作業を行っていく予定である。

鉄製品については、釘をはじめとして大量の遺物が出土しているが、図化して報告した資料以外は、ほとんどが未処理のままである。2013年度は、これら未処理のままとなっていた鉄製品の状況を確認するとともに、保存処理を開始した。今後、継続して作業を行っていく予定である。

５．資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス＃32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。また2009年度より、収蔵用の箱に木製箱を採用している。油脂製のコンテナは、火災の際に甚大な被害を受けるのに対して、木製箱は耐熱性が高く火災時に燃焼するまでの時間が長いことが明らかとなっている。そのため東北大学埋蔵文化財調査室では、整理作業後の収蔵保管にあたっては、油脂製箱から木製箱へ取り替えていくこととし、2009年度から一部は木製箱へ詰め替えを行っている。

これら遺物の全体量を把握するために、容器の種類や大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、木製品や金属製品など保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、この中には含まれていない。東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、表４と図14である。

2013年度の調査によって新たに増加した箱数は、54箱である。2013年度には、富沢地区の芦ノ口遺跡第７次調査と第８次調査の整理作業が完了した。第７次調査では、整理前は２箱であったが、整理後は詰め直しにより１箱となった。第８次調査では、整理前と整理後ともに１箱である。そのため、整理報告済みの箱数は２箱増加して2,838箱となった。未整理のものは、差し引きで51箱増加し116箱となった。合計の遺物総量は、2,954箱である。この内、整理・報告済みのものの比率は96.1％である。

表4　年度ごとの収蔵遺物箱数の推移

年　度	未整理箱数	整理済箱数	合計箱数	備　考
1983	104	0	104	
1984	4	104	108	年報1（1983年度調査分）刊行
1985	113	108	221	年報2（1984年度調査分）刊行
1986	245	108	353	
1987	293	108	401	
1988	920	108	1,028	
1989	811	221	1,032	年報3（1985年度調査分）刊行
1990	1,218	221	1,439	
1991	1,086	401	1,487	年報4・5（1986・87年度調査分）刊行
1992	463	1,028	1,491	年報6（1988年度調査分）刊行
1993	732	1,032	1,764	年報7（1989年度調査分）刊行
1994	742	1,032	1,774	
1995	861	1,032	1,893	
1996	469	1,439	1,908	年報8（1990年度調査分）刊行
1997	435	1,491	1,926	年報9・10（1991・92年度調査分）刊行
1998	236	1,774	2,010	年報11・12（1993・94年度調査分）刊行
1999	117	1,893	2,010	年報13（1995年度調査分）刊行
2000	751	1,926	2,677	年報14・15・16（1996・97・98年度調査分）刊行
2001	1,216	1,926	3,142	年報17（1999年度調査分）刊行
2002	1,234	1,926	3,160	
2003	491	2,370	2,861	二の丸第17地点整理後詰め直し等で箱数減少
2004	491	2,370	2,861	年報18（2000年度調査分）刊行
2005	472	2,384	2,856	年報19－1・20（2001・02年度調査分）刊行
2006	467	2,391	2,858	年報19－3・21（2001・03年度調査分）刊行
2007	281	2,507	2,788	年報19－4・22（2001・04年度調査分）刊行
2008	198	2,619	2,817	年報19－2・23（2001・05年度調査分）刊行
2009	34	2,790	2,824	年報24（2006年度調査分）刊行、地下鉄補償関係調査整理作業終了
2010	34	2,790	2,824	調査報告1（武家屋敷地区11・12地点）作成（印刷刊行は2011年度）
2011	78	2,790	2,868	
2012	65	2,836	2,901	調査報告2（武家屋敷地区13地点）刊行
2013	116	2,838	2,954	調査報告3（戸ノ口遺跡第7・8次調査）刊行

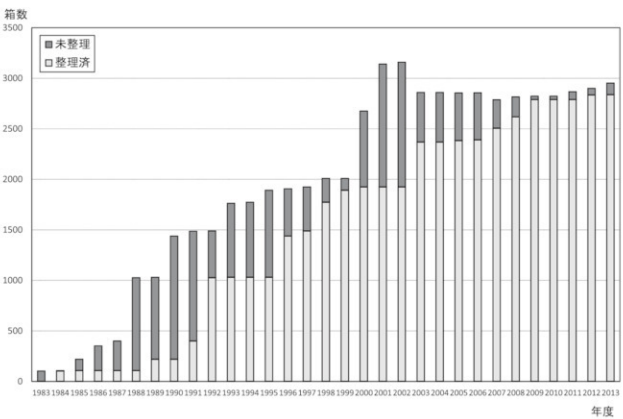


図14　収蔵遺物量の推移

6．研究活動

(1) 受託研究・共同研究・研究協力等

2013年度は、受託研究・共同研究は実施していない。

(2) 学会発表等

2013年度に実施した、調査室の業務に関わる学会での研究発表等としては、以下の１件を行った。

・平成25年度宮城県遺跡調査成果発表会　2013年12月７日　於：東北歴史博物館　主催：宮城県考古学会
「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点」資料発表

(3) 科学研究費採択状況

2013年度において、当調査室の文化財調査員で、科学研究費等の交付を受けたものは次のとおりである。

・菅野智則　学術研究助成基金助成金・若手研究（B）　500,000円（最終年度）
「縄文時代における居住形態の研究」

7．教育普及活動

(1) 非常勤講師

2013年度に、当調査室の文化財調査員で、非常勤講師を担当したものは次のとおりである。

・藤沢　敦　東北大学大学院文学研究科・文学部　考古学特論・各論（後期）「古墳時代研究の理論と方法」
宮城教育大学　日本史講義D（後期）

(2) 授業など教育活動への協力

2013年度の学内外での授業などの教育活動への協力としては、国際文科研究科の深澤百合子教授が担当する授業において、発掘調査現場の見学が５月29日に行われている。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点の調査現場において、発掘調査の状況などを解説した。

(3) 保管資料の貸出

2013年度における、調査室保管資料の貸し出し依頼としては、次の２件であった。

・貸 出 先：仙台市縄文の森広場
平成25年度第１回ミニ企画展「縄文人のくらしと道具～弓矢や土器が使われはじめた頃」
貸出資料：青葉山E遺跡出土縄文土器・石器23点、調査状況写真１点
展示期間：2013年４月12日～６月16日
貸出期間：2013年４月４日～６月26日

・貸 出 先：長野県埋蔵文化財センター
パネル展「被災文化財を守る－東日本大震災と埋蔵文化財の救援と保護」
貸出資料：石巻文化センター考古資料の応急処理作業状況写真４点
展示期間：2013年８月９日～９月６日

(4) 外部からの派遣依頼等

当調査室の業務に関わって、あるいは文化財調査員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

2013年６月１・２日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：国立歴史民俗博物館

2013年６月27日　史跡山畑横穴群災害復旧事業打合せ　於：宮城県大崎市三本木ふるさと研修センター

2013年７月１日　第29回仙台城跡調査指導委員会　於：仙台市役所

2013年７月20・21日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：国立歴史民俗博物館

2013年10月８日　阿光坊古墳群整備検討委員会　於：青森県おいらせ町東公民館

2013年10月11・12日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：八戸市埋蔵文化財センター是川館、青森県内古墳等関連遺跡

2013年10月22日　第30回仙台城跡調査指導委員会　於：庄建上杉ビル

2014年２月27日　平成25年度房の沢古墳群出土品保存管理指導委員会　於：岩手県山田町中央公民館

2014年３月14～16日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：鹿児島大学、鹿児島県内古墳等関連遺跡

担当者：菅野智則

2013年６月29・30日　国立歴史民俗博物館基幹研究「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」
共同研究員　於：国立歴史民俗博物館

2013年７月８～18日　アメリカ合衆国アラスカ州ラバウチャー湾貝塚の発掘調査および北米北西海岸先史時代の民族考古学的研究に関する資料収集
名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室山本直人教授への研究協力

2013年10月21日　2013年度東北史学会大会　於：東北大学
発表題目「東北地方における縄文前・中期集落の展開」

2013年11月30日・12月１日　国立歴史民俗博物館基幹研究「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」共同研究員　於：国立歴史民俗博物館

2014年３月８～10日　国立歴史民俗博物館基幹研究「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」
共同研究員　於：鹿児島県種子島縄文時代遺跡等

(5) 広報活動

・川内萩ホール展示ギャラリー常設展

東北大学川内南キャンパスのある「東北大学百周年記念会館（川内萩ホール）」には、エントランスホールに展示ギャラリーが設けられている。この展示ギャラリーは、本部総務部広報課が事務担当となり、学内からの公募によって、学内の研究資料や研究成果を紹介するために使用されている。しかし、年間を通じた全ての期間を、公募の展示で構成することには困難が伴うことから、一定期間を常設展とすることとなった。東北大学史料館が中心となり、植物園・埋蔵文化財調査室が協力し、川内キャンパスの歴史を基本テーマとする常設展「川内今昔物語」を2011年度から行っている。

2013年度も、常設展として展示を行っている。東北大学のホームカミング・デーの前後には、関連する展示などが行われるため、10月３日に常設展を一旦撤収した。他の展示などが終了した後、11月１日に常設展を再度設

営し公開している。

展示の内容は、2011・2012年度と基本的に同じ内容である。展示資料のほとんどは、埋蔵文化財調査室が保管している出土資料で構成されている。江戸時代の各種遺物が中心であるが、縄文時代・弥生時代・古代の遺物、近代の陸軍第二師団に関わる遺物も展示している。

・調査室ウェブサイト

2011年度から、東北大学の情報シナジー機構・サイバーサイエンスセンターにおいて、ウェブホスティングサービスの試行提供が開始された。これを利用して、埋蔵文化財調査室のウェブサイトを2012年２月から公開した。調査室で刊行した調査報告書については、次に述べる遺跡資料リポジトリが東北大学図書館により進められており、pdfファイルが公開されている。調査室のウェブサイトでは、遺跡資料リポジトリとリンクし、そちらを参照できるようにした。これにより、調査室のウェブサイトで必要な容量を少なくできることから、ウェブホスティングサービスの契約内容は、サブドメインなし（２ＧＢ）の、http://web.tohoku.ac.jp/maibun/を取得して利用することとしている。2013年度も、これまでと同様の形態で、ウェブサイトを維持している。

・遺跡資料リポジトリでの発掘調査報告書の公開

遺跡資料リポジトリは、電子化した発掘調査報告書を公開している歴史・考古学分野のサブジェクト・リポジトリである。研究者・学生を中心に利用需要は大きいものの、小部数発行で一般には利用しにくかった発掘調査報告書を電子化・公開することで、報告書の流通と利活用の促進を目的としている。2008年度に、島根大学図書館を中心に中国地方５県域から、国立情報学研究所のＣＳＩ委託事業として開始された。2010年度以降は、全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトとして、対象を全国に拡大して進められてきた。

東北大学附属図書館でも、2010年度からこの事業に参加し、宮城県内の発掘調査報告書をpdfファイルの形でウェブサイトで順次公開している。埋蔵文化財調査室では、2010年度より東北大学図書館に協力し、調査室刊行の調査報告書を公開していただいてきた。2013年度も、当年度に刊行した『年次報告』『調査報告』を登録して公開していただいている。

８．東日本大震災による被災文化財の救援活動

2011年３月11日に発生した東日本大震災では、津波被災地域を中心に、甚大な被害が発生した。博物館・資料館、資料収蔵施設なども多くが被災し、膨大な量の文化財等が被害を受けた。個人所蔵の文化財の被害も、きわめて大きなものであった。これら被災した文化財を救援して後世に伝えることは、地域の歴史と文化を継承していくために不可欠であり、地域の復興のためにも欠かせない。そのため、被災文化財の救援活動（文化財レスキュー）が、様々な形で行われることとなった。被災文化財の救援活動は、被災した現地からの回収と安全な場所への運搬、劣化を防止するための応急処理、安定した環境での一時保管が当面の作業で、その上で本格的な修復、恒久的な施設での収蔵へとつながっていくこととなる。

埋蔵文化財調査室では、考古資料をはじめとする文化財の取り扱いに習熟し、保存処理の設備と技術を擁した専門家による機関として、被災文化財の救援活動を、震災支援の業務として行ってきた。2011年度には、文化庁が呼びかけて関係機関・団体で構成された東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会による文化財レスキュー事業に参加するとともに、ＮＰＯ法人宮城歴史資料保全ネットワークへの機材貸与などの協力などを行ってきた。被災地からの文化財の回収と運搬、応急処理は2011年度でおおむね終了し、2012年度以降は、応急処理の終了した資料の一時保管を行っている。埋蔵文化財調査室では、石巻市石巻文化センター考古収蔵庫から回収された考古資料294箱の内の194箱、女川町マリンパル女川で展示されていた考古資料を継続して一時保管してきた。　このうち女川町マリンパル女川で展示されていた考古資料については、旧女川第一小学校を利用する形で文化財を収蔵する体制が整ったことから、女川町に返却することとなった。2014年３月18日に、マリンパル女川

を担当してきた女川町産業振興課の職員によって運搬され、３年ぶりに女川町へ戻ることとなった。

救援委員会の文化財レスキュー事業は終了したが、被災した博物館・資料館などの再建には、長期の時間を要することから、被災文化財の一時保管も長期にわたることとなる。そのため、文化財レスキュー事業を引き継ぎ、被災した宮城県内の文化財の保全を図るため、文化財レスキュー事業に関わる関係機関・団体との連携・協力の下に必要な活動を行うことを目的として、宮城県被災文化財等保全連絡会議が2011年10月に設置された。被災文化財等の一時保管施設、地元市町教育委員会などから構成されることとなり、一時保管施設である東北大学埋蔵文化財調査室も、保全連絡会議に参加することとなった。

2013年度には、連絡会議は次の３回開催され、埋蔵文化財調査室でも担当者が出席した。連絡会議では、活動状況、一時保管施設での資料管理状況などについて、情報交換や協議が行われている。

第６回宮城県被災文化財等保全連絡会議　2013年６月12日　於：東北歴史博物館

第７回宮城県被災文化財等保全連絡会議　2013年11月19日　於：東北歴史博物館

第８回宮城県被災文化財等保全連絡会議　2014年３月４日　於：東北歴史博物館

石巻市では多数の文化財が被災したが、被災して使用されなくなった旧石巻市立湊第二小学校を改修して、レスキューされた文化財の仮収蔵施設とすることとなった。この仮収蔵施設で、2013年10月５日と６日の両日、収蔵場所の一斉清掃、資料配架用ラックの組立・設置、資料の再配架などの作業を、50名ほどで集中して作業することとなった。宮城県被災文化財等保全連絡会議が、作業準備と参加者募集の調整を行い、関係機関への協力を要請してきた。この要請を受けて、東北大学埋蔵文化財調査室から１名が参加した。

〈引用・参考文献〉

仙台市教育委員会　1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』

仙台市教育委員会　1995 『仙台市太白区文化財分布地図』

仙台市史編さん委員会編　2006 『仙台市史　特別編７　城館』 仙台市

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985～1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報』１～７

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997～2006 『東北大学埋蔵文化財調査年報』８～18、19－１、20

東北大学埋蔵文化財調査室　2007～2010 『東北大学埋蔵文化財調査年報』19－２・３・４・５、21～24

東北大学埋蔵文化財調査室　2010～2014 『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007～2012』

東北大学埋蔵文化財調査室　2011 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点－仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－』 東北大学埋蔵文化財調査室調査報告１

東北大学埋蔵文化財調査室　2013 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点』
東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２

東北大学埋蔵文化財調査室　2014 『富沢芦ノ口遺跡第７次調査・第８次調査』
東北大学埋蔵文化財調査室調査報告３

宮城県教育委員会　1998 『宮城県遺跡地図』 宮城県文化財調査報告書第176集

Ⅳ．資料

１．国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成６年５月17日　規第56号

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

（目的）

第２条　調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職及び職員）

第３条　調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

（室長）

第４条　室長は、調査室の業務を掌理する。

２　室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

３　室長の選考は、第６条に規定する運営委員会の議に基づき、総長が行う。

４　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（文化財調査員）

第５条　文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

２　文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

（運営委員会）

第６条　調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

（運営委員会の組織）

第７条　運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備・運用委員会各地区キャンパス整備委員会の委員　各１人

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第８条　委員長は、室長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会の会務を総理する。

３　委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（調査部会）
第９条　運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。
（調査部会の組織）
第10条　調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。
一　調査室の特任准教授
二　文化財調査員
三　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人
四　施設部計画課長
五　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長
（部会長）
第11条　部会長は、室長をもって充てる。
２　部会長は、調査部会の会務を掌理する。
（委嘱）
第12条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員は、室長が委嘱する。
（任期）
第13条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員の任期は、２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
２　前項の委員は、再任されることができる。
（幹事）
第14条　運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。
（事務）
第15条　調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。
（雑則）
第16条　この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。
附　則
１　この規程は、平成６年５月17日から施行する。
２　東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。
３　東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。
〔次のよう〕略
附　則（平成16年４月１日規第207号改正）
この規程は、平成16年４月１日から施行する。
附　則（平成18年４月26日規第80号改正）
１　この規程は、平成18年４月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年４月１日から適用する。
２　平成18年４月１日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第４条第３項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第４項の規定にかかわらず、平成18年５月16日までとする。
附　則（平成19年４月１日規第76号改正）
この規程は、平成19年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、平成25年４月23日から施行し、改正後の第７条第１項の規程は、平成25年４月１日から適用する。

２．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2013年度）

委員長	室　　長（文学研究科　教授）	阿子島　　香
委　員	キャンパス総合計画委員会（川内キャンパス環境整備協議会・国際文科研究科長）	黒　田　　卓
	キャンパス総合計画委員会（青葉山キャンパス環境整備協議会・理学研究科長）	福　村　裕　史
	キャンパス総合計画委員会（キャンパスデザイン室特任教授）	杉　山　　丞
	学術資源研究公開センター　教　授	柳　田　俊　雄
	文学研究科　教　授	柳　原　敏　昭
	文学研究科　准教授	鹿　又　喜　隆
	工学研究科　准教授	飛ヶ谷　潤一郎
	災害科学国際研究所　教　授	平　川　　新
	施　設　部　長	西　川　和　慶
幹　事	施　設　部　計画課長	木　村　吉　宏

３．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2013年度）

委員長	室　　長（文学研究科　教授）	阿子島　　香
委　員	文学研究科　教　授	大　藤　　修
	文学研究科　教　授	柳　原　敏　昭
	文学研究科　准教授	鹿　又　喜　隆
	工学研究科　准教授	飛ヶ谷　潤一郎
	学術資源研究公開センター　教　授	柳　田　俊　雄
	災害科学国際研究所　教　授	平　川　　新
	埋蔵文化財調査室　文化財調査員（特任准教授）	藤　沢　　敦
	埋蔵文化財調査室　文化財調査員（専門職員）	柴　田　恵　子
	埋蔵文化財調査室　文化財調査員（専門職員）	菅　野　智　則
	施　設　部　計画課長	木　村　吉　宏

4．東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

〈東北大学埋蔵文化財調査年報〉

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報１	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第１地点（ＮＭ１）	
		仙台城跡二の丸第２地点（ＮＭ２）	
		仙台城跡二の丸第３地点（ＮＭ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報２	1986	昭和59年度（1984年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山Ｂ遺跡第１次調査（ＡＯＢ１）	
		青葉山Ｂ遺跡第２次調査（ＡＯＢ２・旧称ＡＯＦ）	
		青葉山Ｅ遺跡第１次調査（ＡＯＥ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報３	1990	昭和60年度（1985年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第６地点（ＮＭ６）	
		芦ノ口遺跡第１次調査（ＴＭ１）	
		芦ノ口遺跡1976年考古学研究室による調査（ＴＫ）	
		研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	
東北大学埋蔵文化財調査年報４・５	1992	昭和61年度（1986年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和62年度（1987年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第４地点（ＮＭ４）	
		仙台城跡二の丸第７地点（ＮＭ７）	
		仙台城跡二の丸第８地点（ＮＭ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報６	1993	昭和63年度（1988年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）	
東北大学埋蔵文化財調査年報７	1994	平成１年度（1989年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）付帯施設部分	
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第５地点（ＢＫ５）	
		川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報８	1997	平成２年度（1990年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第９地点（ＮＭ９）	
東北大学埋蔵文化財調査年報９	1998	平成３年度（1991年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点（ＮＭ10）	
		芦ノ口遺跡第２次・３次調査（ＴＭ２・ＴＭ３）	
		考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	平成４年度（1992年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第13地点（ＮＭ13）	
		青葉山地区分布調査	
		研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成５年度（1993年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第12地点（ＮＭ12）	
		仙台城跡二の丸第14地点（ＮＭ14）	
		青葉山Ｅ遺跡第２次調査（ＡＯＥ２）	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	平成６年度（1994年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点（ＮＭ15）	
		青葉山Ｅ遺跡第３次調査（ＡＯＥ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	平成７年度（1995年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点（ＮＭ11）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点（ＢＫ４）	
		青葉山Ｅ遺跡第４次調査（ＡＯＥ４）	
		研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	平成８年度（1996年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第６地点（ＢＫ６）	
		青葉山Ｅ遺跡第５次調査（ＡＯＥ５）	
		芦ノ口遺跡第４次調査（ＴＭ４）	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成９年度（1997年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点（ＮＭ16）	
		青葉山Ｅ遺跡第６次調査（ＡＯＥ６）	

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成12年度（2000年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第17地点（NM17）	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第１分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		芦ノ口遺跡第５次調査（TM５）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７） 遺構	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第２分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第３分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７） 木簡・墨書ある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第４分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第５分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（BK８）	
		青葉山Ｅ遺跡第７次調査（AOE７）	
		青葉山Ｅ遺跡第８次調査（AOE８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第９地点（BK９）	
		芦ノ口遺跡第６次調査（TM６）	
東北大学埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）	
		青葉山新キャンパス地区試掘調査	

〈東北大学埋蔵文化財調査室調査報告〉

シリーズ名	書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告１	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－	2011	東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要	東北大学 埋蔵文化財調査室
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）	
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12）	
			川内地区の絵図記載人名の検討	
			川内地区における江戸時代の道路の復元	
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告２	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK13）	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告３	芦ノ口遺跡第７次・第８次調査	2014	芦ノ口遺跡第７次調査（TM７）	東北大学 埋蔵文化財調査室
			芦ノ口遺跡第８次調査（TM８）	
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告４	青葉山Ｅ遺跡第９次調査・芦ノ口遺跡第９次調査－東日本大震災復旧事業関係調査報告書－	2015	青葉山Ｅ遺跡第９次調査（AOE９）	東北大学 埋蔵文化財調査室
			芦ノ口遺跡第９次調査（TM９）	

〈東北大学埋蔵文化財調査室年次報告〉

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011	2013	平成23年度（2011年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2012	2014	平成24年度（2012年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2013	2015	平成25年度（2013年度）事業概要 芦ノ口遺跡第10次調査（TM10）	東北大学埋蔵文化財調査室

＊これらの刊行物は、宮城県遺跡リポジトリおよび東北大学機関リポジトリTOURで全て公開している。
宮城県遺跡リポジトリ　http://rar.miyagi.nii.ac.jp/
東北大学機関リポジトリTOUR　http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/

東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2013

平成27年３月31日

発行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
ＴＥＬ　022（217）4995

印刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166

Annual report in fiscal year 2013

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University